



会議レポート

ACM CHI 2021 会議報告 (1)

2021年5月8日～13日に、ヒューマン・コンピュータ・インタラクション分野の国際会議である ACM CHI (The ACM Conference on Human Factors in Computing Systems) 2021 がフル・オンラインで開催された。本会議は人と情報システムの相互作用を扱う分野の最大規模かつ最も権威のあるトップ・カンファレンスである。1982年より毎年開催され（昨年は新型コロナウイルス感染拡大により開催中止となった）今年で39回目の開催を迎えた CHI 2021 には、世界79カ国から5,147人の参加があった。これは CHI 史上最多の参加者数である。

初の日本（横浜）開催が予定されていた CHI 2021 では、4,000人規模の参加者を想定して準備が進められていた。General Chair の北村喜文先生（東北大学）や Technical Program Chair の五十嵐健夫先生（東京大学）をはじめ、多くの日本の研究者がカンファレンスの運営に尽力した。Organising Committee のメンバ（約100名）のうち30名程度は日本人または日本の研究機関に所属する研究者で、この人数は過去最多である¹⁾。執筆者自身も General Chair のアシスタントとして運営に携わった。本稿では、主にオンライン開催に至るまでの取り組みや、カンファレンスの運営について報告する。なお次号では、CHI 2021 のプログラム編成やその運営内容を、Technical Program Chair アシスタントの小山裕己氏（産業技術総合研究所）からご報告いただく予定である。

■ハイブリッド開催方法の模索

2020年時点、新型コロナウイルス感染症の収束見通しの立たない中ではあったが、Organising Committee は現地とオンラインのハイブリッドな開催形態を検討していた。そこでの論点は、日本在住者のみが現地参加可能となり得る限定的な状況でのハイブリッド開催の意義に始まり、基調講演・口頭発表の時間帯を日本時間に合わせるか否か、その際の中継方法、感染症対策を考慮し

たエキシビジョンホールのレイアウト等であり、議論は多岐にわたった。中でも、タイムゾーン、アクセシビリティ、エクイティおよびインクルージョンをめぐる課題については、Committee 内で Hybrid Conference Advisory Group (hCAG) を発足させ、重点的な調査・議論が行われた²⁾。

2020年6月には現地会場（パシフィコ横浜）の事前調査をハイブリッド形式で実施した。国内の Local Arrangements Chair および Interactivity Chair が現地に赴き、会場を視察すると同時に、その様子をリアルタイムで配信した。その一方で、他の Committee メンバは配信を視聴しつつ確認点や懸念事項を現地メンバに伝えた。また、リアルタイムで参加できなかったメンバ向けに、視察時の録画を共有し説明するオンライン会議を同日中に開催した。この事前調査は、空間的に、タイムゾーン的に分断されたメンバ間で、同期・非同期の方法を併用し、意思疎通・情報共有するという点において、ハイブリッド開催形態のトライアルとしても機能したと考える。

このようにハイブリッド開催の方法を長期にわたり模索したものの、感染状況の改善は見られず、11月にはハイブリッド開催を断念する運びとなった。その際にはメインカンファレンスとは別に、現地イベントを併催する案もあがり、この件については2021年2月頃まで国内の Committee メンバで検討を重ねたが、結局この案も開催見送りとなった。

■オンライン開催

フル・オンラインの CHI 2021 は、Delegate Connect 社のオンライン・カンファレンス・プラットフォーム (<https://www.delegateconnect.co>) で開催された（図-1）。プラットフォームでは大別して1.プレゼンテーション（フルペーパー、ジャーナル、ケーススタディ等）、2.基調講演・パネルおよび、3.インタラクション（インタラクティブティやLate-Breaking Work等のポスター

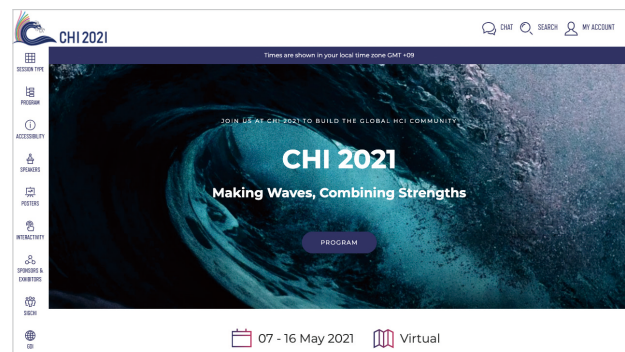


図-1 CHI 2021 で使用したオンラインのカンファレンス・プラットフォーム

やデモを伴う発表)の3形式のルームを設置した。

1.のプレゼンテーションのルームでは、各発表者が事前に提出したビデオプレゼンテーションを再生し、その後発表者とセッションチェアがウェビナー形式でライブQ&Aを行った。セッションの聴講者は画面の横に配置されたチャットボックスや、画面下部のQ&Aボックスから質問やコメントを送ることができる(図-2)。また、ビデオプレゼンテーションについては、セッションの前後も非同期でアクセスできるオンデマンド・コンテンツとしても提供された。2.の基調講演およびパネルでは、事前録画ではなくリアルタイムのプレゼンテーションとQ&Aを行った。3.はプラットフォームにリンクされたZoomを利用したルームである。ここでは、従来のオフラインのカンファレンスのポスターセッションと同様にラウンドテーブルの方法を採用した。すなわち、聴講者がZoomに入室すると発表者が適宜研究紹介を行う形式である。ポスターやデモビデオについても、

1.のビデオプレゼンテーションと同様にオンデマンド・コンテンツとしてアクセス可能にした。また、こうしたルーム以外に、常時利用可能なヘルプデスクやテクニカル・サポート、コリドー(参加者同士が自由にコミュニケーションできるチャットルーム)等が提供された。

このように、さまざまなシーンやセッションを想定して準備したものの、オープニングや一部のセッションでアクセスしにくい状況が発生し、また Delegate Connect 上でのプログラムの一覧性が低いといった問題が見られた。その一方で、質問・チャット用のシステムとライブストリーミングを視聴するシステムが1つに統合されているため複数のアプリケーションを行き来する必要がないという点や、ルーム移動コストが低いため、セッション単位ではなく発表単位での移動も容易となり、聴講者からより多くの発表を視聴できた点を高く評価する意見も見られた。

■ CHI 2022

次回のCHIでは、2022年4月30日から5月6日にかけてハイブリッド開催が予定されている。現地会場はニューオーリンズであり、Cliff Lampe (University of Michigan) と Simone Barbosa (Pontifical Catholic University of Rio de Janeiro) が General Chair を務める。また、CHI2022ではハイブリッド開催に向けて公平で公正、かつ利用しやすい環境の構築のためのチームを発足させ、Katta Spiel (Vienna Technical University) と Christina Harrington (DePaul University) が Equity, Justice and Access Chair に就任した。今年見送りとなったハイブリッド開催形態が、CHI 2022でどのように展開し、どのような体験を創り出すのだろうか、今後に注目したい。

参考文献

- 1) 北村喜文: CHI 2021のGeneral Chairを引き受けることになった経緯, 日本バーチャルリアリティ学会誌, 26巻, 1号, pp.10-14 (2021), https://doi.org/10.18974/jvrsj.26.1_10
- 2) Planning of a Hybrid Conference Format, CHI2021 blog post, <https://chi2021.acm.org/information/4396.html>



図-2 ライブストリーミングでのプレゼンテーションの様子



図-3 CHIでは毎年マスコットキャラクターのぬいぐるみやマグカップ等のカンファレンスグッズを販売している。CHI 2021では横浜の文字とCHIのロゴがプリントされた法被を着たハロキティ(左)とフェイスマスク(右)をオンライン販売した。

■池松 香
(ヤフー(株))

